



Data	
監督:	ウィリアム・フリードキン
原作:	ジョルジュ・アルノー『恐怖の報酬』
出演:	ロイ・シャイダー/ブルーノ・クレメル/フランシスコ・ラバル/アミドウ/ラモン・ビエリ/ピーター・カペル/カール・ジョン/チコ・マルティネス/フレデリック・レデブル/ジョー・スピネル/ロザリオ・アルモンテス

👁️👁️ みどころ

クルーゾー版『恐怖の報酬（1953）』のDVDに続いて、日本初公開となるフリードキン版の本作を劇場で鑑賞。興行的に『スターウォーズ』（77年）に完敗し、失意のどん底にあえぎながら、なぜフリードキン監督は40年間もその完全版の上映にこだわりを・・・？

そんな背景事情や裏話も興味深い、4人の“トラック野郎”が挑む320キロメートルもの死のジャングル越えにはものすごい迫力が。難所はいろいろだが、最大の見せ所は恐怖の“大吊り橋”。積荷のニトログリセリンは少しの衝撃でもたちまち大爆発だから、如何にしてここを突破するの？そして、“恐怖の報酬”1万ドルを手に入れる男は誰？

本作だけでも面白いが、クルーゾー版と併せて観れば“2粒で4度おいしい”はずだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□クルーゾー版に続いてフリードキン版を！完全版で！■□

1953年のカンヌ国際映画祭でグランプリを獲得したアンリ・ジョルジュ・クルーゾー監督の『恐怖の報酬（1953）』は、イブモンタン等が出演したフランス映画。私はそれを全く知らなかったが、友人が貸してくれたDVDで鑑賞したところ、その面白さにビックリ！そんなタイミングで、続いて、アメリカのウィリアム・フリードキン監督が1977年にクルーゾー監督の『恐怖の報酬（1953）』をリメイクした、フリードキン監督版『恐怖の報酬（オリジナル完全版）』を劇場で鑑賞することに。1977年に日本で公開された時は92分の“短縮版”だったが、今回はそのオリジナル完全版で、121分のも

のだ。2018年11月25日付日経新聞「名作コンシェルジュ Cinema」は「手に汗握る場面連続 凄みあふれる傑作」という見出しを付け、映画評論家、芝山幹郎氏の解説で同作を大きく取り上げていた。

1977年といえば、『スターウォーズ』(77年)がハリウッド史上空前の大ヒットとなり、全世界を席卷した年で、パンフレットによると、同作は1億2700万ドルの興行収入を挙げた。その他『トランザム7000』(3970万ドル)、『真夜中の向こう側』(1700万ドル)、『遠すぎた橋』(2100万ドル)、『ジェット・ローラーコースター』(820万ドル)、『ザ・ディープ』(3100万ドル)、『エクソシスト2』(1390万ドル)、等が人気を集める中、わずか590万ドルの『恐怖の報酬』は興行的に大失敗となっただけではない。そのため、日本をはじめ北米以外では、フリードキン監督に無断で約30分短縮された92分の“短縮版”が公開され、まともに評価されることもなく公開は終了してしまっただけではない。そんなフリードキン版『恐怖の報酬』が、なぜ今オリジナル完全版で、なぜ日本で公開されることに・・・？

■完全版の日本公開！その“内幕”はキネ旬とパンフで！■

キネマ旬報は映画ファン必読の映画雑誌。その2018年11月下旬号(No.1795)は6頁にわたって『恐怖の報酬(オリジナル完全版)』公開の内幕を解説しているのだから必読！さらに、本作のパンフレットも必ず購入して読む必要がある。

2018年は100歳で死亡した橋本忍を忍んで、大阪の映画館シネヌーヴォーでは「生誕百年追悼橋本忍映画祭」が開催された。そこで私は『白と黒』(63年)、『私は貝になりたい』(59年)をはじめ鑑賞するとともに、『砂の器』(74年)、『日本沈没』(73年)を再度鑑賞し、1970年代の邦画の素晴らしさを再確認した。いくら映画好きの私でも、1974年に弁護士登録した後はあまりの忙しさのため映画館に行くことはほとんどなかったが、それでも『日本沈没』と『砂の器』は観ていたから偉いものだ。

しかし、前述した『スターウォーズ』をはじめとする1977年のハリウッド映画のヒット作は全然観ていない。ましてや、『恐怖の報酬』はその存在すら知らなかったから、はじめて『恐怖の報酬(オリジナル完全版)』の日本公開にこぎつけた関係者たちの涙ぐましい努力を『キネ旬』で読むとビックリ。筆者は、本文のラストで「まったく泣く子とフリードキン様には勝てない」と嘆きながら、「今も予断を許さぬ交渉が続いている。」と書いていたが、なるほど一本の映画を公開するについてここまでの苦労が・・・。

しかして、本作の劇場公開のチラシには、「狂気と執念に憑かれた映画作家が放った一世一代の巨篇。40年の封印を解かれ、遂にその全貌が明らかになる時が来た。」「ヴェネツィア、ロサンゼルス、パリ、カンヌ、ロンドンを経て、再評価の波は遂に日本に来た！」「映画史上空前の待望とともに【失われた傑作】がいま、ふたたびまい降りる！」の文字が躍っている。私は既にクルーズ版『恐怖の報酬』をDVDで観たから、物語の筋は分かっ

ているが、舞台も俳優も全く違うフリードキン版のリメイクの出来は如何に・・・？

■□■フリードキン監督は、なぜ『恐怖の報酬』に固執を？■□■

本作のパンフレットは2018年11月24日発行の最新のもの。そこでは、ウィリアム・フリードキン監督のプロフィールとともに、「運命の神秘」と題する監督自身の“手記”（アメリカ版ブルーレイ封入シートより抜粋）がある。私は知らなかったが彼は私もよく知っている『エクソシスト』（73年）の監督で、同作はアカデミー賞（脚色・音響）2部門、ゴールデングローブ賞（監督賞）を受賞している。また、その前の、彼が監督した『フレンチ・コネクション』（71年）も有名で、同作はアカデミー賞（作品・監督・脚色・主演俳優・編集）5部門と、ゴールデングローブ賞（監督賞）を受賞している。

しかして、上記の“手記”によれば、彼は上記2作の大成功によって、いわば“燃え尽き症候群”のような状態に陥つたらしい。そんな状況下、彼が20年前に見たクルーザー監督の『恐怖の報酬（1953）』が「互いに憎み合い、争っている国々が、核爆発事故を防ぐために手を組まねばなくなることのメタファーのように思われた」らしい。そのため、「リメイクではない、まったくのオリジナル脚本で勝負したかった。」そうだが、彼がそこで語っている『恐怖の報酬』へのこだわりはすごい。これを読めば、彼が渾身の力で監督した1977年の『恐怖の報酬』がなぜ興行的に失敗したのかはともかく、今回の日本でのオリジナル完全版の公開に大きな期待を寄せていることがよく分かる。

4人の男たちがニトログリセリンを積んだトラックを運転していく物語であることは、本作もクルーザー版『恐怖の報酬（1953）』と同じだが、本作の前半約1時間は4人の男たちの“自己紹介”に費やされる。そして、そこでは、彼が“手記”で語っていたように、メキシコ、イスラエル、パリ、アメリカの各国であつと驚く大事件が起こるため、その“犯人たち”はどこかの国に逃亡せざるを得ないことになる。その結果、本作において、4人の男が“トラック野郎”としてニトログリセリンを運んで行くことになる舞台とは？

■□■舞台は南米・ポルヴェニール。4人のトラック野郎は？■□■

本作前半は、①メキシコのベラクルス、②イスラエルのエルサレム、③フランスのパリ、④アメリカのニュージャージー州エリザベスを舞台とし、それぞれ何の関連性もない4つの“事件”が紹介されていく。それらはトラック野郎とは全く無縁の物語だから、なぜこれが『恐怖の報酬（1953）』のリメイク版なの？という疑問が湧いてくる。しかし、全く関連性のない4つの物語の中で、①では殺し屋のニーロ（フランシスコ・ラバル）が、②ではテロリストの実行後、一人だけ警察の追及を逃れた男カッセム（アミドゥ）が、③では不正を暴かれて逃げ出した投資家のマンゾン（ブルーノ・クレメル）が、④ではアイリッシュ・マフィアの一味で、これも一人だけ脱出に成功した男スキャンロン（ロイ・シャイダー）が、地の果ての国、南米のポルヴェニールに流れ着いていた、という設定が見

えてくると、やっと『恐怖の報酬（1953）』との接点が見えてくることになる。

南米のポルヴェニールでは、マンゾンとカッセムはそれぞれ“セラノー”と“マルティネス”という偽名と身分証を手に入れて、アメリカの石油資源会社が経営する製油所で、多くの労働者たちの中に紛れ、汗と油にまみれながら働いていた。スキャンロンも、また“ドミンゲス”という偽名で運転手の職に就いていた。彼は村唯一の食堂「エル・コルサリオ」で日々酒をあおり、絶望と死の恐怖を紛らわせていたが、それはなぜ？この時点では①のニーロはまだ南米・ポルヴェニールに来ていないようだが、彼は一体どこに逃げているの？そんな中、ある日、村から320キロ離れた山岳地帯の油井で爆発事故が発生。これはどうも、反政府ゲリラの仕業らしい。石油会社の担当者コーレット（ラモン・ピエリ）と、爆発物専門家のデル・リオス（チコ・マルティネス）が事故現場を視察した結果、これはニトログリセリンの爆風で消火するしかない、との判断に至ったが、山岳地帯特有の乱気流の影響で、ヘリでの輸送は絶対不可能だと聞かされたコーレットは、トラックでの陸送を決断することに。

しかして、多額の報酬の約束と、実技テストを経て、ドミンゲス、セラノー、マルティネス、そしてマルティネスの友人マルクス（カール・ジョン）の4人のトラック野郎を決定する段階になると、『恐怖の報酬（1953）』でおなじみのストーリーが本作でも展開されることになる。そして、出発時間になってもマルクスが現れないため、マルティネスが部屋をのぞくと、マルクスは何者かに殺されており、離れた場所からその様子を見ている男がいたという設定もほぼ同じ。そして、この年配の男こそ、数日前にDC3機で飛行場に着陸したニーロだ。

このように“出走”する4人の“トラック野郎”が確定すると、ここからがいよいよ『恐怖の報酬』の本番。さて、クルーズ版との異同は？そして、本作のユニークな面白さは？

■□■エピソード満載！最大の見せ場は大吊橋！■□■

本作のキャッチフレーズは「報酬」は1万ドル。一触即発のニトロ運搬に命を賭けた男たちの運命は—。」と「遂に40年の封印を解かれた伝説の超大作【オリジナル完全版】日本初公開」の2つだが、「クルーズ版」との対比や、「オリジナル完全版」の初公開に至る事情等を含めて、本作の鑑賞には800円のパンフレットの購入が不可欠だ。4人のトラック野郎の配役陣も、当初はスティーヴ・マックィーンやマルチェロ・マストロヤンニらが予定されていたそうだが、現実の俳優陣は日本人に馴染みのない俳優ばかりだから、パンフでの勉強が不可欠になる。また、何より必要なのが、パンフレットの中に収められている「エピソード集1」「エピソード集2」のお勉強だ。

ここでは、本作最大の見せ場になる“大吊橋”突破のシークエンスの撮影が如何に大変だったかが解説されている。それによると、この大吊橋はロケ地先のドミニカ共和国で3ヶ月間、100万ドルをかけて建設されたが、撮影開始の段になって、下を流れる大河が

干上がってしまい、撮影が不可能になったため、結局メキシコのトゥステペックに似たロケ場所を見つけて吊り橋を再建し、最終的に300万ドルを費やした、らしい。そのため、フリードキンは度重なる撮影遅延と予算超過を繰り返す本作を、本気で「呪われていると思った」と表現しているが、まさに4人のトラック野郎が命懸けで突破するこの大吊橋は“呪われている”としかいいようのない代物だ。本作のサントラLP版やサントラCD版のジャケットは劇画風に描かれたこの大吊橋を渡ろうとするトラックの姿が描かれているが、その迫力はすごい。

『ラッシュ/プライドと友情』(13年)では、F1レースの勝敗に命をかけた2人の男の命懸けの姿が描かれていた(『シネマ32』184頁)が、本作では4人の“トラック野郎”が命懸けで、この大吊橋の突破にかかる姿に注目!

■フリードキンの作家性とは?本作の映画論の展開は?■

フリードキン監督は1977年公開の本作ではコケてしまったが、その失敗は『フレンチ・コネクション』(71年)と『エクソシスト』(73年)の大成功の後のことだ。彼がクルーザー版『恐怖の報酬(1953)』のリメイク版ではない、全くのオリジナル脚本で勝負したかった気持ちは、パンフレットにある「運命の神秘 ウィリアム・フリードキン」と題した“手記”の中にハッキリ書かれている。

また、本作のパンフレットには、「エピソード1」「エピソード2」の他、樋口尚文(映画評論家・映画監督)の「希釈なしの獐猛でデモーニッシュな映画体験」というコラム(論文)と、「ハリウッド映画の分岐点となった1977年の夏と『恐怖の報酬』という解説)があるから、その勉強も不可欠だ。前者では「初公開時はクルーザー版『恐怖の報酬』と比較して批判する向きもいたが、それはまるで意味のないことだろう。フリードキンはオリジナルを換骨奪胎して、あくまでニューシネマ時代のアンチヒーロー造型と破格の手法に訴えており、これはまるで別物の試みなのである。」と分析している。そして、後者では「『恐怖の報酬』は〈作家主義派〉超大作の最初の挫折となった。」としながらも、「だが、最後に付け加えれば、公開当時から『恐怖の報酬』を支持していたアメリカで最も著名な映画評論家、故ロジャー・イーバートは、1979年にあらためて『恐怖の報酬』を「完全に見過ごされていた傑作」と評し、作品と監督フリードキンの手腕を讃えたが、以後、『恐怖の報酬』は年々少しずつ支持者を増やし、数十年かけてようやくその評価を逆転させるに至ったのである。」と結論づけている。この樋口氏のコラムは超難解でクソ難しいが、本作の歴史的立場づけと本作の価値についての映画論を展開するためには必読文献だ。

なお、パンフには賀来タクト(映画関連文筆家)の「ニトログリセリンを運んだ魔法使いータンジェリン・ドリームと『恐怖の報酬』ー」というコラムもあるが、これは本作の音楽担当のタンジェリン・ドリームに関する解説なので、私はパス。

2018(平成30)年12月26日記